

前回は、和歌の構造について井筒豊子の二つの論文から次のような洞察を得た。すなわち、和歌の言葉(詞)は、「こころ」と「ことば」という意識フィールドの現象運動として顕現し、語の統辞的な組織に規定されつつ共時的・空間的な意味連鎖として言語フィールドに具現化される。その際、意識フィールドでは「おもひ→詞」系統より、「情→余情」系統に価値が置かれるのだが、「情」(狭義のこころ)は意識化された対自的現象でありながら、意味的には無分節であり、その外化としての「余情」とは文節的な詞に付随しながら拡散していく「響き」のようなもので、言語的な意味解釈とは違う方法で感得されるものといえる。そうして和歌の「こころ／ことば」は言語フィールドにおいて詞として一余情を伴いながら一顕現し、三十一音節短詩という緩和的な統辞構造の上に意味の累畳の偏在を果たしていく。

ところで、和歌は統辞構造としては緩和されているが、それは独自の音律的(音節的)な構造を生み出している。そこで、今回は、仁尾雅信の考察(『『おふでさき』の歌学的考察』『天理教学研究』26号、『『おふでさき』の歌学的表現』『G-TEN』第23号)に依拠しながら、和歌としての「おふでさき」の音律的な構造について外観したい。仁尾は「同音・同語の反復表現」と「句切れ」に着目して、和歌としての「おふでさき」を特徴づけている。

同音・同語の反復表現

同音の反復表現は以下のようにまとめられる(なお、仁尾が挙げる事例から、ここではそれぞれ一つずつ挙げていく)。

- ① 句頭の同音:「このはなしどふゆう事にをもうかな／これが大一このよはじまり」(七号70)では、「こ」音が初句、四句、五句のそれぞれの句頭に配置されている。
- ② 句末の同音:「それをばななにもしらさるこ共にな／とりはらわれたこのさねんわな」(十七号38)では、間投助詞「な」が初句、三句、五句に配置されている。
- ③ 句頭・句末に関係ない同音:「今までもしりてはなしてはなしとも／といてあれどもなんの事やら」(三号61)では、「て」音が繰り返されている。
- ④ 句頭が同じ子音:「これからハ神がたいない入こんで心すみやかかわけてみせるで」(二号36)では、初句、二句、四句でK音が繰り返されている。

続いて、同じ語句の反復表現も多数見られる。

- ① 任意の句に同じ語句:「どのよふな事をするのもみな月日／なにをゆうのもみな月日やで」(十二号160)では、「みな月日」という語句が繰り返して用いられている。
- ② 句末に同じ語句:「しかときけくちでゆうてもをもふてもどこでゆうてもをもふたるとて」(五号87)では、「ても」という語句が二句、三句、四句の句末で繰り返されている。
- ③ 句頭・句末に関係なく同じ語句:「このよふを納も上天もかみ／上と神との心わけるで」(四号104)では、「かみ」という語句が同音異義的に繰り返し使われている。

さらに、同じ語が数首にわたって繰り返される用例もある。

- ① 初句が同じ語句で始まる:三号では9「このはしら」、10「こ

の水を」、11「このすいの」、12「このはなし」、14「このはなし」、15「このよふの」と「この」を初句に用いる歌が続いている。

- ② いずれかの句が同じ:五号の48から54では、「かやし(す)」というモチーフの語を繰り返す中で、「神のはたらき」が48・49、「はたらき」が50に再出し、「事」「なに(ん)の事」「をもう(ふ)」という語句が50から54の五首にわたって用いられている。
- ③ 前歌の結句の一部が次歌に用いられる:「このところなにをするにもとのよふな／事をするのもみな月日なり」「とのよふな事をゆうにもみな月日／そばなるものハマねをしてみよ」(十一号73・74)では、「とのよふな事」と「みな月日」が二首を連結させるように用いられている。

句切れ

句切れとは、第五句以外での文の流れの切れ目であるが、仁尾は韻律(調子やリズム)ではなく、文法的な切れ目を基準にして、以下のように考察している。

- ① 初句切れ(60首前後):「しやんせよ／なんぼすんだる水やととをいれたらにごる事なり」(三号65)では、初句が「しやんせよ」と命令形になり、強調として歌意の中心が第一句に置かれている。また、倒置法的にも用いられる。
- ② 二句切れ(14首):「このみちハをやがたのみや／一れつわどふそしいかりしよちしてくれ」(十四号56)では、「たのみや」で切れている。この用例は少ない。
- ③ 三句切れ(約520首):「このたひハめづらし事をゆいかける／心しづめてこれきいてくれ」(六号1)では、五七五七七の定型に合わせて第三句で切れている。この用例は最も多く、その表現効果も多岐にわたる。
- ④ 四句切れ(約120首):「にんけんをはじめたしたるこのをやハそんめゑでいる／これがまことや」(八号37)では、第四句で区切り初句切れと対照的に、結論を結句に凝縮させている。結句には命令形、依頼形、体言止めの場合がおおく、また倒置法としても用いられている。
- ⑤ 無句切れ:「よろつよのせかい一れつみはらせどむねのハかりたものハないから」(一号1)では、拝読上の息継ぎはあるものの、意味上は一首の中で切れることはなく結句まで続いている。大半はこの無句切れである。
- ⑥ 複数の切れ:「さあたのむ／なにをたのむとをもうかな／はやくなりものよせてけいこふ」(十五号72)では、初句と三句に句切れがあり、小刻みなリズムを作っている。

さて、文法を基準としたこうした句切れは当然統辞構造に由来している。とはいえ、その文節的な意味単位の相互の文法的関係は明瞭ではなく、そのゆるやかなまとまりが五七五七七の三十一音の枠にはめられることで形をなしているといえよう。たとえば、前出の「さあたのむ」は、「さあ／たのむ」と切れ目をもつが、五音構成の一つの句の枠内でまとまっている。加えて、同音・同語の反復によって、各首は関連づけられ、重層的に一つの総体を築いていく。